

別紙 1 - 1

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	甲	第	号
------	---	---	---	---

氏 名 奥村 隼也

論 文 題 目

Mortality in patients with community-onset pneumonia at low risk of drug-resistant pathogens: Impact of  $\beta$ -lactam plus macrolide combination therapy

(市中発症肺炎の耐性菌低リスク群では $\beta$ ラクタムとマクロライドの併用療法により 30 日予後が改善していた)

論文審査担当者

名古屋大学教授

主 査 委員

荒川 定章 


名古屋大学教授

委員

横井 香平 

名古屋大学教授

委員

長尾 龍平 

名古屋大学教授

指導教授

長谷川 好規 

## 論文審査の結果の要旨

今回、市中発症肺炎の耐性菌低リスク群において、βラクタム単剤療法よりもβラクタムとマクロライド系抗菌薬併用療法が予後を改善し得るかどうかを明らかにすることを主たる目的として、市中発症肺炎の多施設共同前向き観察研究の事後解析を行った。本検討の結果は、市中発症肺炎の耐性菌低リスク群に対して、βラクタム単剤療法と比較してβラクタムとマクロライドの併用療法の有効性を示唆する結果であった。宿主因子のうち PaCO<sub>2</sub> 高値、白血球低値、ADL 不良、Alb 低値、ヘマトクリット低値、高齢、頻呼吸、低体温はそれぞれ、30 日死亡リスクを上昇させる方向に作用しており 30 日予後リスク因子であると考えられた。予後を評価する際の交絡因子になり得るため、将来の介入試験において層別化等の際に考慮すべき因子と考えられた。

本研究に対し、以下の点を議論した。

1. 耐性菌リスクの評価法については、地域差があるため、それぞれの地域における耐性菌リスクを考慮した評価を行うことが望ましいと考えられる。本検討と同コホートを用いた先行報告において、入院時所見から肺炎頻用抗菌薬の感受性を評価するスコアリングモデルを提案しており、他の耐性菌リスク評価法と比較して予測能に優れていた。そのため、本検討においては、先行報告に示した耐性菌リスク判定を行いリスクが低い症例を解析対象とした。
2. βラクタムとマクロライド併用療法のデメリットについては、マクロライド系抗菌薬の副作用として心電図上の QT 延長は知られており、実臨床においては心疾患既往がある症例において留意が必要と考えたが、予後改善効果が推定されたため使用のメリットが上回ると考えた。費用面についてもマクロライド抗菌薬は比較的安価であることから、入院治療において臨床的に問題点は少ないと考えられた。
3. βラクタムとマクロライド併用療法における耐性化誘導の可能性については、適切な併用使用においては薬剤耐性を誘導しないことが他の報告から示されており、感染管理上の問題も少ないものと考えた。

以上の理由により、本研究は博士（医学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

## 試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号	氏 名	奥村隼也
試験担当者	主査	荒川直親	副査 <sub>1</sub>	横井香子
	副査 <sub>2</sub>	長尾能雅	指導教授	長谷川好規
(試験の結果の要旨)				
<p>主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。</p> <ol style="list-style-type: none"><li>1. 耐性菌リスクの評価法について</li><li>2. <math>\beta</math>ラクタムとマクロライド併用療法のデメリットについて</li><li>3. <math>\beta</math>ラクタムとマクロライド併用療法における耐性化誘導の問題について</li></ol> <p>以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、呼吸器内科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。</p>				